



## ヨドコウ迎賓館「雛人形展」

明治時代に京都の老舗「丸平大木人形店」によって制作された、ヨドコウ迎賓館ゆかりのひな人形を展示します。

■期間 2月11日～4月2日・午前10時～午後4時

■会場 ヨドコウ迎賓館

■料金 大人500円、小・中・高校生200円

■申し込み 2月1日（水）から下記2次元コードへ※期間中は日時指定予約制による入館

問い合わせ 淀川製鋼所 PR グループ ☎ 06-6245-9103



## あしや芸術さんぽ Vol.7

美術博物館が休館の期間、芸術家達が切り取った芦屋と現在の風景を紹介するコラムを連載します。最終回の今月は、日本画家・福田眉仙が描いた岩園小学校付近の風景画を紹介します。

【美術博物館休館のご案内】令和4年7月1日～令和5年3月末(予定)は改修工事のため休館。今後の休館中の活動や工事後の再開館のスケジュールなどについては、随時ホームページでお知らせします。再開館予定は、令和5年4月中旬です。



福田眉仙《山河放光》1950年頃  
紙本淡彩 94.8×179.0cm  
芦屋市立岩園小学校蔵

翠ヶ丘町あたりから北西の方角へ、六甲の山並みを望んだ風景です。右下に大きく描かれるのは阿保親王塚古墳、そのすぐ左上に白く輝くのは岩園小学校。右手の山の中腹には、1937年六麓荘に建設された芦屋国際ホテルも描かれ、左下には宮川が流れています。三角屋根の民家が立ち並ぶ間には自転車や車が走り、多くの人々が行き交います。

作者である日本画家・福田眉仙は1875年、兵庫県赤穂郡瓜生村（現在の相市市矢野町瓜生）に生まれます。幼い頃から絵に興味を持ち、19歳頃に上京し久保田米僊、次いで橋本雅邦に師事します。1898年には雅邦の縁で、岡倉天心、横山大観らと日本美術院の結成に参加しました。

美術院の活動のかたわら、国内各地を旅し写生に励んでいた眉仙。天心はその様子に目をかけ、中国で東洋画の根幹を学んでくるよう眉仙へ勧めます。これを受けて眉仙は1909年12月から1911年6月まで、中国に滞在し各地を写生しました。帰国後、その成果を天心に見せると、「よくやった。しかしこれを真のお前の山水画とするには、今から20年ほどどこか山にでも引き込んで勉強を重ねよ」と叱咤激励を受けます。一方、先輩にあたる大観は、眉仙の画力を認めた上で「スケッチをすべて焼き捨てて抽象的になって描かねばならない」と言います。眉仙はこの言葉に方向性のちがいを感じ、徐々に画壇と距離を置くようになります。1917年に西宮・苦楽園へ移住、

1920年には現在の六麓荘町に居を構え、天心の言葉通り写生に基づく制作に励む道を選びました。

眉仙は、本作で描かれる六甲山脈を、中国滞在中に特に愛した山・峨眉山と重ねていたようです。その愛着ぶりは、帰国後に眉の一字をとり「眉仙」という画号に改めたことからもうかがえます（それまでは最初の師・米僊の由来で「麥僊」）。また峨眉山の登頂の記念に作った印が、本作にも押されています。写生を我が道と定める、その起点ともいべき山を六甲山に重ね、毎日眺めていたのでしょうか。写実に生きた画家の手腕は、本作でも、当時の景観や人々の様子を確かに伝えてくれています。

眉仙は1930年兵庫県美術家連盟、1948年には芦屋市美術協会の創立に参加し、芦屋市展の審査員を務めるなど、芦屋市および兵庫県美術の育成にも貢献しました。

### 参考文献

中村吉孝「福田眉仙の画業」『福田眉仙展』図録、芦屋市立美術博物館、1992年  
高瀬晴之「福田眉仙の生涯」『日本画家 福田眉仙展』図録、姫路市立美術館、2020年



現在の風景／右下に写る大きな森が阿保親王塚古墳(翠ヶ丘町)

問い合わせ 美術博物館 ☎ 38-5432